

「看護科学研究」の発展に向けて

「看護科学研究」編集委員長 太田 勝正

インターネットジャーナル「看護科学研究」が、「大分看護科学研究」として誕生してから12年、「看護科学研究」に改名してから6年が経過しました。

本ジャーナルは紀要とは異なり、また、学会を基盤としていないために誰でも論文の全文を読むことができ(会費を伴う入会が不要だけでなく、IDなどの登録手続きさえも不要)、さらに、誰でも投稿できるわが国では他に例を見ない形態のジャーナルです。なぜ、そのような形態を目指し、続けてきたかは、前編集委員長による2005年の巻頭言をご覧ください(草間 2005)。そして、ここまで本ジャーナルを継続、発行してこられたのは、関係者のご努力と大分県立看護科学大学(看護研究交流センター)の大きな支援によるものと感謝しております。

さて、H24年5月時点で4年制の看護系大学は203校に達し(教育課程数では、208課程)、平成3年度の11校と比べるまでもなく、その数は急速に増えています。さらに、看護系大学院も博士前期課程(修士課程)が140校、後期課程(博士課程)が69校に急増しており、大学に所属する教員以外にも多くの看護研究者が日夜、看護・健康科学に関する研究に励んでいる様子が窺えます。その中の一人として、最近困っているのが、特に大学院修士生の成果を公表する場、すなわち、投稿する雑誌に限られていることです。多くの大学は紀要もしくは紀要的な雑誌を自ら編纂しており、優秀な研究成果を公表する場をなんとか確保できているかも知れません。一方、日本看護系学会協議会に参加している看護系学会は現在38学会ありますが、そこに投稿する際には学会に加入しなければなりません。共著者に非会員がいる場合、そのすべてに入会を求める学会がほとんどです。紀要であれ学会誌であれ、それぞれに目標をもち、質の高い研究成果を世に送るために大きな貢献をしているのは言うまでもありません。しかし、博士前期課程を修了したあとに臨床に戻る者や、もともと異なる専門分野で活躍している共著者にとっては、投稿のためだけに学会に新規加入することに抵抗があるかも知れません。理由はそれだけではないと思いますが、看護教育・研究界には眠ったままになってしまう優れた研究成果が多くあることを懸念しています。

すでに述べたように、本ジャーナルは、投稿に関する資格に制限を設けておりません。また、研究領域も特定の分野に限定しておりません。そして、読者は無限大です。このようなジャーナルを是非、看護・健康科学に関連する研究成果の公表の場の一つとしてご活用頂ければ幸いです。

なお、今までの地道な活動にもかかわらず、本ジャーナルの知名度は今ひとつ上がってきませんでした。その理由の一つとして、雑誌投稿区分のあり方があるのではと考え、この度の新しい編集委員会の発足とともに、投稿区分をより細かく再編いたしました。具体的には、一般的な研究論文の投稿区分として「原著」に加えて、新たに「研究報告」という区分を設けました。もともと「資料/報告」という区分でカバーしていましたが、原著には少し及ばない研究論文の位置づけがより明確になればと思っております。「資料」の位置づけも見直しました。さらに、このジャーナルのもつ大きなアクセス性を活用して、研究目的ではない日常の看護、保健医療の活動を広く伝えるために、新たに「ケースレポート」というカテゴリーを設けました。詳細は投稿規定をご覧ください。

この「看護科学研究」をここまで発展させてきた前編集委員長の意志を受け継ぎながらも、さらに発展させていくための一層の努力を新しい編集委員会と編集事務局が一丸となってしていきたいと思っております。皆様のご理解と積極的な投稿があってこそこのインターネットジャーナルです。是非、優れた業績の発表の場としてご活用頂きますようお願いいたします。

引用文献

草間朋子(2005).「看護科学研究」としての新たな出発. 看護科学研究6, 1. http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/PDF/6_1/6_1_1.pdf